

仏様のおはなし新シリーズ第102集「じりじりと照りつける光のなかで」

今般の新型コロナウイルスの感染拡大により、世界の国々には協調的な動きが見られますが、その一方でコロナ禍の責任を他国に押し付けようとする自国ファーストともいって、国家のエゴイズムが蔓延しているようにも思います。

先の戦争より七十五年の月日が流れました。人々の記憶からますます戦争は遠ざかってゆくようですが、ここにきて、新たな冷戦の台頭もあり、問題山積みの大変なご時世でございます。

悲しみは時間が解決してくれると人はよく言います。しかし、忘れてはいけないことがあります。それは戦争の記憶です。その悲しみを繰り返さないためにもそれを常に記憶にとどめる日々の営みが必要です。戦争は一人の人間、または一つの国家が被害者であると同時に、加害者にもなります。このことは特に忘れてはいけません。

先の大戦の末期、本土防衛の時間を稼ぐ「捨て石」として県民の四人に一人が命を失った沖縄県で、今年も六月二十三日に戦没者の追悼式典が例年どおり糸満市の県平和祈念公園の「平和の礎」の近くの広場で、沖縄県主催のもと開催されました。礎には軍人、民間人を問わず、沖縄戦で亡くなつた国内外二十四万人の名前が刻まれています。

戦争は一言で言えば、殺し合いです。またその戦場は例外なく、たまたまそこに居合わせ生活していた人々をも巻き込み、殺し殺され、その結果死体が放置され横たわっていた場所だったのでございましょう。時が過ぎても、命を落とした人の無念さはいうまでもなく、その遺族にも生涯消し去ることの出来ない悲しみだけが残つたのです。

最後に、詩人 石垣りん氏（一九二〇一二〇〇四年）のことばを胸に刻みます。

ここに書かれたひとつ前の名前から、ひとりの人が立ち上がる。

ああ、あなたでしたね。

あなたも死んだのでしたね。

活字にすれば四つか五つ。

その向こうにあるひとつといのち。
悲惨にとぢられたひとりの人生。

あなたはいま、どのような眠りを、眠っているのだろうか。

そして私はどのように、さめているというのか？

死者の記憶が遠ざかるとき、同じ速度で、死は私たちに近づく。

